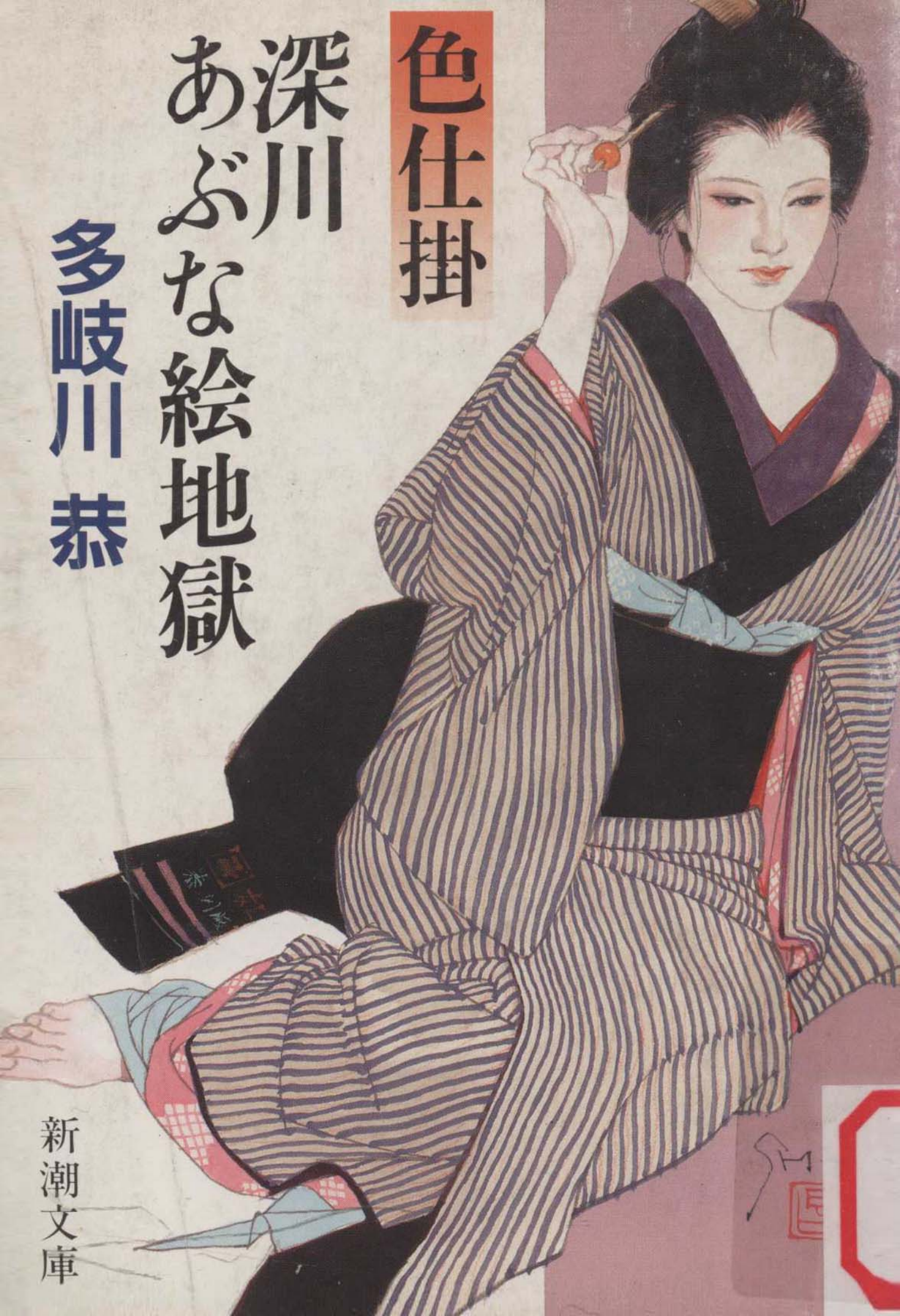


色仕掛

深川
あぶな絵地獄

多岐川 恭

新潮文庫



いろ じ かけ 色仕掛 ふか がわ 深川 え じ ごく 絵地獄

新潮文庫

た - 48 - 3



平成二年七月十五日 印刷
平成二年七月二十五日 発行

著者 多岐川 恭

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Kyô Takigawa 1990 Printed in Japan

ISBN4-10-109913-8 C0193

江苏工业学院图书馆

新潮文庫

色仕掛 深川 柳 ぶな 絵 地獄
藏 書 章

夢 岐 川 恭 著



新 潮 社 版

4501

目次

第一話	箱入娘はお目の毒……………	七
第二話	女が回る水車……………	四七
第三話	死んだ夜鷹が福の神……………	八七
第四話	夢路の果ては地獄の囃……………	一二七
第五話	行き暮れて雀のお宿……………	一七三
第六話	心の闇に狂い花……………	二二一
第七話	極楽浄土を逆落し……………	二五三
第八話	怨みの的は生人形……………	二九五

解説 宮部みゆき

色仕掛いろじかけ

深川あぶな絵地獄ふかがわえじごく

第一話

箱入娘はお目の毒

一

四十年輩、ほろ酔いの男が、暮れ方の油堀あぶらぼりのほとりを歩いてしたが、岸にひとりたたずむ女があつて、その後姿の腰付きがただならず艶えんで、網を張った夜鷹よたかとでも見て取ったか、つんのめるようにして寄つて行つた。深い秋、つるべ落しに赤い陽ひが沈むと、すーっと暗くなり、風が冷たくなつていた。

肩を並べて、右手は何気なく女の腰へ。

「姐ねえさん、おめえも酔い醒さましか？ ドブくせつ臭え風に、あんまり吹かれていると、毒氣に当るぜ」

「そりゃあご親切に……おや、お前さん、厭いやだよ。亀かめさんてえ人だろう？」

こちらを向いた、ぼったりした顔が、舟まんじゅう、お新だった。

「こいつは驚いた。お前さんはたしか、お新さん……いつか会つた時に、そう思つちやあいたが、いい女だなあ。つい二、三日う前、卯平うへいさんに会つたぜ」

「そうだってねえ。わたしも聞いたよ。いいご機嫌きげんで、どこへ？」

「なあに、あてはなしさ。宵の口というのに、帰って寝るのも気が利かねえから、一杯やって、いい女を探していたところだ。運よく、ふるい付きてえようなのをつかめえたと思ったら……これだ」

「おだてっこなしさ。こっちは婆あだ」

「そんな婆あと、一晩でも添寝ができりゃあ本望だが、亭主持ちの、それも卯平じゃあ、指をくわえるほかはねえ」

「ばからしい。卯平なんざあ、居候の穀潰しさ。亭主なんぞと立てちゃあいねえよ。亀さん、本当にわたしと寝たいかえ？」

そこは年季の入った男たらしで、ややうつむけた顔から、探るように見上げた瞳に、妖しい滑らかな光が宿っている。濃化粧の顔は夕顔のよう。薄明りが七難をかくしてくれた。

「本当も何も」

男はお新の両肩をわし掴みにした。

「……お新さん、おめえがこれほどの女だとは思わなかった。じらしておいて、さようならは罪だろうぜ」

「じらすのなんのと、おいらは回りくどいことは嫌いさ。おいでな、うちへ」

「うちへって……」

「化物が出そうなあばら家だが、静かで邪魔はねえよ。卯平は、よそからちよいと小金が入

ったから、今夜はお定まりで、どこぞへお泊りだ。あしたは元通りの空っ尻で舞い戻るやつさ。気兼ねはねえよ」

お新の丸っこい笑い声が川面に消えた。

それから一刻。因速寺裏手の墓守小屋の中は、光の乏しい行灯の、灯芯の焦げる音がジジジ……家の囲りでも、生き残った虫の音が微かだった。

男は敷布団の上に大の字。肌は生っ白いが毛深いやつで、ヒビが組み敷かれて、降参したようにも見える。しかも魂を抜かれでもしたような面持で、茫乎とした目をみごとな裸のお新に向けていた。お新は男の腹にすっかり腰を据え、こちらを向いた両の肢を放胆に男の肩先に投げ出し、上体は反り加減、うしろにやった左手は、男の太腿に突張って体を支え、右手に持っているのは朱羅宇のキセルで、スパリスパリと煙を吐いている。一服吸い終ると、灰を男の黒い胸毛の上に吹き落し、横にのせた新しい煙草を丸めて、落したやつから火を吸いつけるのだが、灰は男の胸毛を焦し、熱い！　と思う瞬間に、消えてくれることになっている。

「うっ、チチチ……」

と男は身もだえをするが、お新は知らぬ顔だ。ただ、お新の体は、絶えず小浪でも立つように、ふるえているのだ。それは男の肌にか伝わってこない、微妙な痙攣じみたもので、強くなり弱くなり、そのたびに男は弱々しいうめき声を立てる。

お新は平気なのかというと、そうでもなく、時々、キセルの吸口が唇から離れ、唇は開きつ放しになり、目を閉じて、眉根がキュッと寄ることもあるが、波が静まると、またスパスパだ。

「もうかなわねえ。お新さん、勘弁してくれ」

「おや、弱音かい？ それじゃあ一休み、一杯やろうかねえ。卯平の飲み残しがあるはずだ」

お新はようやく、ふんわりと男の上にかぶさって、なんとなく、フフフと笑う。

それからさらに半刻。万が一、卯平が戻ったらと怖れをなしたのか、男は身仕舞いをして酒を飲んでいた。お新は着物を肩から羽織ったばかり、惜しげもなく男に肌身をさらして見せながら、その膝に寄りかかって鼻唄だった。

「お新さん」

「お新と呼び捨てにしとくれ。水臭い」

男はヤニさがって苦笑し、

「それじゃあお新、こいつは少ねえが取ってくれ」

「おや？ 金は引込めな。客じゃあねえんだ。お前、おいらをちよんの間、買ったつもりでいたのかえ？」

「そ、そうじゃねえが、邪魔にはなるめえ。取っておいてくれ。おれはお新、心底ほれた

ぜ」

「そうかい。それじゃあ気持ちに甘えて……こいつは二分だ。お前、よっぽど金回りがいいね。それだけ、男の出来がいいんだ。卯平と来た日にゃあ、甲斐性^{かいしょう}がなくなつて、箸^{はし}にも棒にもかからないよ。あれでも昔は、隅^{すみ}に置けねえところもあつたんだが……切れ時かねえ」

「年だからなあ。なあお新、おめえさえそのつもりなら……」

「いいのがいるのじゃないかい、亀さん」

「いるもんか。おれがほれたと言つたのは嘘^{うそ}じゃねえ。卯平と話を付けたら、おれのうちへ来てくれるか？」

「こつちもほれ加減だ、お前なら願つてもないけれど、あとになつて逃げを打たれるのからはらしい。おいらの本性を知っているのかえ？」

「と言うと、舟での稼^{かせ}ぎかなんぞのことか？ とつくに承知の上で言うのよ」

「悪い世渡りもたんとするお姐さんだ。それもご存じかえ？」

「そいつはいっそ頼もしい。それじゃあかくすこともねえ。こちららも同類だ。こりゃあ神様のお引合せかもしれねえぜ」

「驚いた。そうは見えなかったが……金回りがいいのも、その道でひと儲^{もう}けかい？」

「こいつは序の口。金が入るのはこれからだ。小さな仕掛けじゃねえ」

「聞きたいねえ。……なに、言いたくなけりゃあ構わねえのさ」

「なんだ、怒ったのか？」

「怒りゃあしないさ。そりゃあお前の仕事なもの」

「お新、必ず卯平と切れ、おれのものになるか？」

「念には及ばねえよ。卯平には、おいらからキツパリ引導を渡しやあ済むのさ。お前が少々色をつけてくれりゃあ、なお綺麗きれいに片が付く」

「よし、それで決った。水臭みずくせえとふくれっ面つらをされちゃあ閉口だ。……もうちょいと、こつちへ寄りな」

「あの二本棒野郎、吐きやがったか」

「吐いた。思いのほかに性根のねえ馬鹿ばかだよ。それにしても、お前の鼻はまだ、なかなか利くようだ」

「気になる言い方をしやがったな」

と卯平は塩からい笑顔を見せた。

「……持ちつけねえ金を、空威張りだかおっかなびつくりだか、あちこちでバラ撒まいている様子を見りゃあ、目星はつくつてもんだ。どこからか、思いもかけねえ金が入って、そいつを使い尽しても、まだあとがあるようなそぶりだ。元来亀吉ちやうだいって野郎は、善にも悪にも手の出ねえ間拔けだから、どうせ、何か悪事のおこぼれ頂戴ちやうだいだろうとは思っていた。存外大仕事

「だなあ。軍師はだれだかわからねえが、うめえことを考えやがる」

男の名は亀吉、天台の末寺で正光寺という寺が、俗にいう浜通り、大川口に臨む熊井町にあつて、住持が良円、納所坊主が光念。良円のだいこくがお安、この女は近くに小家をもらつて住んでいるが、お安の弟が亀吉で、毎日正光寺に出て雑務をやっている。掃除や墓守の下男は別に彦兵衛という年寄りがいるから、因速寺の墓守卯平より、格は上のようなだが、実は大して仕事もない。新仏の湯灌、埋葬の折に人足を指図するくらいのものだ。お安の縁で食わせてもらっている役立たずなのだが……

「こいつは孫兵衛に知らせるがいい」

と卯平。貧乏徳利を振つてみて、底でわずかに音がするのを、グイと一飲みしてほうり出した。

「うまくゆすりゃあ、たんまり入るね」

とお新。これはゴロリと横になり、大あくびをして目を閉じた。

「……馬鹿は馬鹿だが、あの味はそれほど悪くもなかったよ、卯平」

卯平は耳にも入れぬ様子で、何やら思案顔になった。

サアツとやってきたのが時雨。屋根やひさしを派手に叩いていたが、それはほんのひとときで、嘘のように雨脚が絶えた。

二

「ほう、絵草紙屋さんで。それはそれは」

正光寺の住持良円は巽屋孫兵衛が脇に置いてある風呂敷包みにジロリと目をやった。

「……で、そこにお持ちなのが、美人画、役者絵のたぐいかな？」

「まあ、そのようなもので。こちらへお詣りに参りましたついでに、お得意様で近くにお住まいのお方へ、お持ちしようと存じましてね」

「わたしも絵は好きでね。ちよいと見せていただだけまいか」

「いえいえ、お見せするようなものじゃあございません」

「いいじゃありませんか。気に入ったのがあれば求めますよ」

「これは、弱りましたな。実を申せば、あまり大っぴらには持ち出せぬ代物で……」

「つまり、例のやつじゃな。それならば、なおさら拝見したいて」

良円は細い目を、さらに細くした。顔はまんまる、福々しい。一見色白、上品なのだが、唇だけはやけに赤く、娘のそのようにふくらんで、まくれ上っているのが坊主らしからず、難だ。年は四十半ばだろうか。なまぐさい匂いを嗅ぎ取るのは、わけもない。

正光寺の庫裡。本堂より大きくて、造りが立派という妙な寺で、孫兵衛、お京が招じられ